The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	The Lion's Parliamentにおける寓意のメタファー
Author(s)	大森, 文子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 21-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77038
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

The Lion's Parliament における寓意のメタファー

大森文子

１．はじめに[1]

本研究は、1808 年に刊行された寓意詩 *The Lion's Parliament* について、認知詩学の観点から分析を施すものである。

19 世紀初頭、1807 年から 1808 年にかけて英国で児童向け動物寓意詩が数十点相次いで刊行されたが、本寓意詩は、それらの一連の動物寓意詩に連なるものである。言語文化共同研究プロジェクトにおいて、渡辺秀樹教授と筆者は 2007 年度より動物寓意詩群について共同研究を続けてきた。渡辺は、2011 年、2013 年、2015 年、2016 年、2019 年に英国図書館に出張し、合本で架蔵されているそれらの寓意詩を毎回数点ずつ転写して帰国後に本文校訂を行い、インターネット上で閲覧可能な作品も含めて 10 点の作品を翻訳した。大森はそれらの本文に基づき動物名の比喩義の構造性について考察した。これまでに 6 点の寓意詩作品についての共同研究の結果を、2008 年から 2016 年にわたって断続的に『言語文化共同研究プロジェクト』報告書上で掲載、刊行した。そのタイトルを下に記す。

1. *The Butterfly's Ball, And the Grasshopper's Feast.* 1807.
2. *The Peacock at Home: a Sequel to the Butterfly's Ball. Written by a Lady.* 1807.
3. *The Lion's Masquerade. A Sequel to the Peacock at Home.* 1807. （以上 2008 年刊行）
4. *The Feast of the Fishes or The Whale's Invention to his Brethren of the Deep.* 1808. （2012 年刊行）
5. *The Jackdaw at Home.* 1808. （2014 年刊行）
6. *The Council of Dogs.* 1808. （2016 年刊行）

上記の寓意詩は、*The Council of Dogs* 以外はすべて動物たちの宴会を描く詩となっている。*The Butterfly's Ball, And the Grasshopper's Feast* では虫たちが賑やかな宴会を開き、*The Peacock at Home* では虫の宴会の噂を聞きつけ自尊心を傷つけられたクジャクが負けじと鳥たちを集めて宴会を開き、*The Lion's Masquerade* では虫たちや鳥たちの宴会を知ったライオンが嫉妬心に駆られて四足獣を集めて宴会を催す。*The Feast of the Fishes or The Whale's Invention to His Brethren of the Deep* では、海の王者クジラが孤独な時間を過ごすことが嫌になり、魚たちなど海の生き物を宴会に招く。*The Jackdaw at Home* では、クジャクが開催した宴会に誘われなかったコクマルガラスが、自分の面目を潰したクジャクの失礼な態度に憤慨し、もっと立派な夜会を開いて高慢なクジャクに自らの栄華を見せつけてやろうと饗宴を開催する（渡辺・大森 2008、2012、2014 参照）。

これらの「宴会」をテーマにした寓意詩群とは対照的に、*The Council of Dogs* は犬たちが集まって開く「議会」がテーマとなっている。議会で発言するグレーハウンドは「我らのような高貴な獣が『蝶の舞踏会』や『バッタの宴会』などを傾聴できようか。行くところ行くところで『獅子王の仮面舞踏会』や『孔雀の宴会』が我らが耳で高鳴るのを黙って聞いていられようか。我らはこうした詩を黙って聞くべきなのか、そして時代を超えて遥か昔より我らが名を他の獣とは截然と別けて来た名誉を主張せずに済ますのか。犬たちよ、そんなことはしてはならない。」(“shall we noble beasts / Hear of *Butterflies Balls* and *Grasshoppers Feasts* ? / Hear dinned in our ears, wherever we roam, / The *Mask seeing Lion* and *Peacock at Home* ? / Shall we hear all this, nor assert the fair fame / That for ages long past has distinguished our name ? – / Forbid it ye Dogs!” (*The Council of Dogs* ll. 19-25)) と、宴会をテーマとした寓意詩群の題名を明示しながら、それらを黙して傾聴することを不名誉なことだと主張している。この詩では犬たちが自分たちの自尊心を満たすために、宴会ではなく議会を開くという手段を選び、他の寓意詩に描かれたように料理や歌舞音曲で娯楽と親善の催しを繰り広げることはせず、ひたすら自分たちの意見の主張に終始する（渡辺 2016、大森 2016 参照）。

[1] 本研究は 2019 年度科学研究費補助金基盤研究 C「英語メタファーの認知詩学」（研究代表者大森文子）、同基盤研究 C「英詩メタファーの構造と歴史」（代表者渡辺秀樹）、同基盤研究 C「英詩メタファーの構造と歴史 II」（代表者渡辺秀樹）の助成を受けている。

今回の共同研究で対象とするのは、この犬の議会の寓意詩と同年の 1808 年に刊行されたライオンの王国の議会を描く詩である。この詩に登場する動物たちは、犬の議会の寓意詩と同様、娯楽や親善を目的とはせず、議題について自らの見解を表明するという行動をとる。

大森（2016）では、*The Council of Dogs* の背景にある擬人化メタファーと寓意のメタファーの写像の構造を考察し、擬人化メタファーでは＜人間＞の概念領域から＜動物＞の概念領域への写像が成立しているのに対し、寓意のメタファー＜動物＞から＜人間＞へと写像が反転する様を明らかにした。*The Lion's Parliament* においても擬人化と寓意のメタファー写像がこの作品の意味の複合性を形作っている様子を考察したい。本研究ではまず、この作品に登場する動物の名称がどのような比喩義をもつかを *Oxford English Dictionary* (*OED*) で確認した上で、本詩の描写において各々の動物に付与されている役割・身分と、*OED* 掲載比喩義を一覧表にまとめた（Appendix を参照されたい）。比喩義の中には、本紙で描写された内容と無関係と思えるようなものもあるが（例えば crocodile の「そら涙を流す人」という比喩義など）、本詩と同時代に成立している比喩義については念のために掲載した。しかし、本詩が刊行された 19 世紀初頭よりも大幅に時代が下る（例えば 20 世紀になってからの）用法や、アメリカ口語用法、人間以外のものを描写する比喩など、本詩とは無関係であることが明らかな語義については掲載していない。この一覧表では、本詩で描写される動物たちの有事に際しての立場や行動についても併記している。この一覧表を参考にしながら、以下では本詩における議会の議事進行に焦点を当て、動物議員たちの描写の背景にある擬人化と寓意のメタファーの写像の背景を探っていく。

なお、本稿における *The Lion's Parliament* の引用およびその解釈は、本共同研究プロジェクト報告書に掲載した渡辺秀樹教授による本寓意詩の校訂本文・翻訳・解説に依拠する。

２．君主ライオンと暴君の虎

この詩では、他の動物寓意詩と同様に、登場する動物たちは、本能のままに動く者としてではなく、人間のごとき者として擬人的描写がなされている。描かれる動物たちは知性、感情、意志をもち、言葉を話し、議員として議会に出席し、発言する。彼らはライオンを国王として仰ぎ、王国という社会を形成し、国家の維持と繁栄のために何が必要かという観点から議論を戦わせる。これらの描写はすべて、知性、感情、意志をもち行動する＜人間＞を根源領域とし、その領域によって＜動物＞という目標領域を理解しようとする概念メタファーに基づく描写である。

この寓意詩で描かれた王国に君臨するライオンを例にとると、彼も動物としてではなく、人間と変わらない存在として擬人的に描写される。王国の危機にあたって、議会に参集した議員たちにメッセージを書き（"His majesty's Message, important indeed! / Announcing most serious and critical news," (ll. 16-17))、「議員たちの知恵と熱意に頼りたい」("The King on your wisdom and zeal must depend," (l. 23))と呼びかけて、彼らに審議を促す。国王の勅語に応じて議会での審議、議決を経て貴族院議員たちが作成し上奏した勅語奉答文 (address) を差し出される国王ライオンは、威風堂々と（"in state" (l. 121)）玉座に着き、臣下からの奉答文に優雅な態度で答え（"The King of the Beasts made this gracious reply:" (l.139))、その度量の大きい返答は、臣民の称賛を得る（"The Lion's magnanimous answer admir'd;" (l. 146))。このような威風堂々たる態度、優雅さ、度量の大きさといった性質は、生物学的見地で規定されるライオンの属性ではなく、人間がライオンを人間的に見ることにより、すなわち人間という概念領域のフィルターを通して見ることにより、認識する性質である（Lakoff and Turner（1989: 193-194）参照）[2]。ライオンを「百獣の王」("The King of the Beasts" (l.139))と見る捉え方も然りである。動物界は、王制という社会制度を設けているわけではない。動物たちは、食物連鎖の掟の中で生息しているが、それは社会制度ではない。草食動物を食べる肉食獣は、草食獣を社会的に支配し、統治しているわけではなく、本能に基づいて捕食行動を行っているだけである。肉食獣を支配者とみなし、その中でもライオンを、その寸法や風貌から王者とみなすのは、人間のメタファー的なものの見方である。*OED* の見出し語 "lion" の語義

[2] Lakoff and Turner (1989:193-194) は、例えば「ライオンは勇気があり気高い」（Lions are courageous and noble.）や「狐は賢い」（Foxes are clever.）などは動物の性質を人間の性質によって理解したメタファー命題であると述べ、動物は本能によって行動するが、私たち人間は、動物の生態を人間の生態の観点から理解し、人間の特徴的な性質を表す言葉を使って動物の生態を描写するのだと論じる。

1.a.では、ライオンは「気高く荘厳な風貌」（“a noble and impressive appearance”）を持つと特徴づけられ、それが百獣の王と呼ばれる所以だと述べられている。[3]このような認識のしかたが擬人化である。

国王ライオンが深刻で危機的な状況として議員たちに知らせる内容は、虎の法外な野望（“The Tiger’s ambitious, extravagant views!” (l. 18)）である。ライオンは虎を「大胆な簒奪者」（“daring Usurper!” (l. 19))、「うぬぼれの強い独裁者」(“vain Despot” (l. 21)）と呼び、悪意と策略でライオンの王国の国法を覆し、島国を略奪するぞと脅迫してくる（“Now threatens, … with malice and guile, / Our laws to subvert, and to ravage our isle.” (ll. 21-22)）と訴える。雄牛もライオンと同じく虎を「うぬぼれの強い独裁者」と呼び、その意図（“The vain Despot’s intentions” (l. 30)）を実現させまいとの強い意志を表明する。ライオンの場合と同様、虎も、動物界において独裁制を敷いているわけではなく、自らの本能に従って生きているだけであるが、その捕食ぶりに独裁者の残忍さを重ね合わせるという人間のメタファー的な認識のしかたがこの詩における虎の描写の基礎となっている。虎の生態を、野望をもち、大胆でうぬぼれが強く、悪意に満ち、策略を講じて他国を侵略しようとし、その意図を脅迫の形で表明するというように、人間と同じような知性・感情・意志・行動形態をもつ者として捉えなおしているのである。虎を擬人的に扱うこのメタファー的な認識は、*OED* の見出し語 “tiger” の語義 1. にも表れており、虎は「獰猛さと狡猾さ」を持つものとして知られる（“proverbial for its ferocity and cunning”）と明記されている。[4]

大森（2016）で考察対象とした犬の寓意詩 *The Council of Dogs* の場合と同様、この寓意詩においても、動物の描写のしかたの認知的背景として注目すべきは擬人化メタファーとともに寓意のメタファーである。動物寓意詩では一般的に、動物が人語を話し、知性も感情ももち、意志を働かせて行動するという擬人的描写がなされるが、作品を読み進める読者は、登場する動物キャラクターの人間さながらの行動やキャラクターどうしの関係、彼らがたどる運命を通して、人間社会の諸相をときに滑稽に、あるいは批判的に描こうとする作者の意図に気づく。そこに働いているのは、擬人化のメタファーとは写像の方向が反転した＜動物＞から＜人間＞への「寓意のメタファー」の写像である（【表１】参照）。*The Lion’s Parliament* が描くライオンを国王と戴く動物の王国は、英国の喩えであることが容易に想像できる。*OED* の見出し語 “lion” の語義 5.c.では、英国のエンブレムにライオンが描かれていること、British Lion という句が比喩的に英国を指すことが示されている（Appendix 参照）。本プロジェクト報告書の渡辺の解説でも言及されているように、この寓意詩の刊行と同年の 1808 年に出た風刺画 “The Valley of the Shadow of Death” においても、英国は Leo Britannicus としてライオンの姿で描かれている（この風刺画の詳細な内容については、渡辺の解説および The British Museum のオンラインコレクション [5] を参照）。そして、この寓意詩でうぬぼれの強い独裁者として描かれる虎は、本共同研究プロジェクト報告書に記載した本詩テキストの注 2 および解説で渡辺が述べている通り、この寓意詩が刊行された 1808 年当時、英国と敵対していたフランスのナポレオンを指すと推測できる。同年の 1808 年の風刺画 “The Corsican Tiger at Bay” では、二角帽（bicorne）をかぶりナポレオンの顔をした「コルシカの虎」が描かれている（この風刺画の詳細な内容については、渡辺の解説および The British Museum のオンラインコレクション [6] を参照）。Ruwe（2014）は *The Lion’s Parliament* をトーリー党のプロパガンダとして位置づけている（p. 184）。本寓意詩は、登場キャラクターをすべて動物にし、一見おとぎ話風に語りながら、その実は当時の英国が直面していた現実、不安定な世界情勢を色濃く反映し、強い政治的メッセージを含んだ寓話であると言える。

---

[3] “A large carnivorous quadruped, *Felis leo*, now found native only in Africa and southern Asia, of a tawny or yellowish brown colour, and having a tufted tail. The male is distinguished by a flowing shaggy mane. (The Maneless Lion of Gujerat is a recognized Asiatic variety with only a slight mane.) It is very powerful, and has a noble and impressive appearance; whence it is sometimes called ‘the king of beasts’.” (*OED* “lion” *n.* 1.a.)

[4] “A large carnivorous feline quadruped, *Felis tigris*, one of the two largest living felines, a cat-like maneless animal, in colour tawny yellow with blackish transverse stripes and white belly; widely distributed in Asia, and proverbial for its ferocity and cunning.” (*OED* “tiger,” *n.* 1.)

[5] https://research.britishmuseum.org/research/collection_online/collection_object_details.aspx?objectId=1479850&partId=1

[6] https://research.britishmuseum.org/research/collection_online/collection_object_details.aspx?objectId=1484762&page=8&partId=1&searchText=rowlandson

【表１】　擬人化メタファーと寓意のメタファーの写像の仕組

	根源領域		目標領域
擬人化メタファー	＜人間＞ 人間の知性・感情・意志・行動	⇒	＜動物＞ 動物の生態・行動
寓意のメタファー	＜動物＞ 動物の生態・行動	⇒	＜人間＞ 人間の知性・感情・意志・行動

３．議会での動物たちの擬人化と寓意

議場に集まった議員たちは、大法官の象が読み上げる国王ライオンの勅語を聞く。「我が臣民と王権と王冠を守るため、諸君の英知と熱意に頼りたい」(“The King on your wisdom and zeal must depend, / His people, his rights and his crown to defend” (ll. 23-24)) という国王の言葉を受けて、貴族院議員たちが議論を始める。まず雄牛（Bull）が口火を切り、続けて馬（Horse）、猟犬（Hound）、熊（Bear）、犀（Rhinoceros）、穴熊（Badger）、雄鹿（Stag）、鰐（Crocodile）、川獺（Otter）、ビーバー（Beaver）、ライオン王子（Prince de Lion）、豹（Leopard）、雄羊（Ram）が次々に発言する。発言者は計 13 名で、虎との戦争に対する各々の見解を主張する。積極的に戦争を遂行すべしと主張する発言者は 13 名のうち 10 名、戦いを避けて和平の道を探るべしと戦争に消極的な発言をする者はわずか２名である。(【表２】参照)。残りの１名は雄羊で、ライオン王子が主戦派側についたことに歓喜した豹の興奮気味の発言に対し、「王家の血筋正しき王子を論争の引き合いに出すとは大いに恥ずべきことです」(“Earl Leopard should feel much asham’d / To allude to a prince of the blood in debate” (ll. 104-105))と諌め、その一方で「王子様のご発言を拝聴し嬉しく存じます」 (“The Royal Duke’s words gave him pleasure to hear,” (l. 107))　としながら、結局のところ戦争に賛成なのか反対なのかは明言せず、「投票は自らの良心に従って、恐れることなく行います」(“he’d vote as his conscience directs, without fear.” (l. 108)) と曖昧な発言をする。この曖昧発言により、主戦派、和平派の両方から「異議あり！異議あり！」とどなり声が上がり (“*The question! The question!* was roar’d on each side,” (l. 109))、これにより審議は終了となり、賛否の採決が行われる (“to divide” (l. 110))。

【表２】　議会での発言者の戦争に対する見解

戦争に対する見解	議会での発言者
主戦派	雄牛（Bull）、馬（Horse）、猟犬（Hound）、犀（Rhinoceros）、穴熊（Badger）、鰐（Crocodile）、川獺（Otter）、ビーバー（Beaver）、ライオン王子（Prince de Lion）、豹（Leopard）
和平派	熊（Bear）、雄鹿（Stag）
曖昧	雄羊（Ram）

発言する貴族院議員たちは、大型獣が多数を占めている。その中で、ライオン（王子）や豹のような獰猛な肉食獣は主戦派の立場をとっているが、意外なことに、主戦派は大型肉食獣ばかりではない。雄牛や馬や犀のような大型草食獣、猟犬や穴熊のような肉食ではあるが中型の獣も主戦派となっている。

主戦派の意見を観察して注目に値するのは、自らの身体的特徴を武器として利用するという発想である。最初に発言する雄牛は「私はこの角で、諸君を先導しましょう」(“I’ll lead you on with the point of my horn.” (l. 36)) と述べ、角という武器を振りかざして軍の先駆けとなる決意を表明し、続けて発言する馬は「彼（＝虎）は私の蹄や貴方の角の洗礼を受けて自分が生まれたことを後悔するでしょう」(“he’ll rue the sad day he was born, / If he meets with *my hoof*, or a gore of *your horn*.” (ll. 41-42) と豪語し、敵を突き刺す牛の角と同様に、自らの蹄も敵を蹴散らす武器となることを主張する。[7] 雄牛と馬に対して賛成意見を述べる猟犬は「私は虎の居場所を見つけて追い詰めてやりましょう」(“I’ll hunt down the Tiger wherever he’s found.” (l. 48))と、猟犬独特の鋭敏な嗅覚と足の

[7] 雄牛の角と馬の蹄の武器としての共通性は、馬の発言の中で “If he meets with *my* ***hoof***, or a gore of *your* ***horn***” (l. 42) において “hoof” と “horn” が<h>の頭韻を効かせて並べられていることにより強調されている（渡辺秀樹教授の指摘による）。

速さを武器として、敵の動向の偵察と追跡を買って出る。自らの身体的特徴を誇示する彼らの発言は、人間の、自らが保持する軍事力を誇示し、戦争における優位性を主張する態度を想起させる寓意のメタファーとなっている。英国は比喩的に John Bull と呼ばれている（*OED* “John Bull” 1.a.参照）。主戦派の筆頭として発言したのが雄牛（Bull）であるということは、彼ら主戦派の身体能力を誇示する発言が、英国の軍事力の誇示を寓意的に表していることを示唆する。

さらに、水辺で生息する 3 種の動物が主戦派として発言しているのは興味深い。その中の鰐は、10 種の主戦派の動物のうち唯一の爬虫類である。鰐の発言に続くのは川獺とビーバーで、これらは哺乳類であるが、水生に適応する中型獣である。肉食性で気性が荒い鰐の生態は、敵を「まるごと海に沈め、壊滅させ、あるいはむさぼり食ってやりましょう」(“The whole he would sink, or destroy, or devour. (l.78)) という彼の発言と整合性が取れている。鰐の「我が国王は海の王であります」 (“His Monarch should still be the *King of the Sea*!” (l. 76)) という発言、川獺の「海の帝国は我々の利権であります」 (“The empire of waters he said was *our right*” (l. 80)) という発言は、ライオンの王国が海洋国であることを物語っており、海における軍事力が突出した英国の寓意となっていることを示している。議会における審議の最初に発言した雄牛、馬、猟犬は陸上を生息地とする動物であり、英国陸軍の喩えとなっているのに対し、水生に適応する鰐、川獺、ビーバーは英国海軍を表している。詩の中では、鰐と川獺は「海軍司令官」(“naval commanders” (l. 84)) という立場であること、鰐は海軍大将 (“Admiral” (l. 73)) であることが明示されている。[8] 上記の主戦派の動物たちの描写に表れている寓意のメタファーは【図１】のような写像により構成されている。

【図１】主戦派の動物の様態が表す寓意のメタファー

＜動物＞	⇒	＜人間＞
雄牛		英国
身体能力の誇示		軍事力の誇示
雄牛の角、馬の蹄		陸軍の武力
雄牛が角で突く、馬が蹄で蹴る		陸軍の戦闘行為
猟犬の嗅覚と走行		陸軍の偵察
鰐、川獺、ビーバーの水中活動		海軍の軍事行動
鰐の捕食行動		海軍の戦闘行為

和平派は、主戦派と比べて数が少なく、2 頭のみである。熊は雑食動物、雄鹿は草食動物で、獰猛な肉食獣とは異なるが、いずれも大型獣であり、柔和な、あるいは臆病な中・小型草食獣とは一線を画しているところが興味深い。和平派の中で最初に発言するのは熊で、主戦派に反対する理由として、「陛下の大臣方はこれまでの議論で述べておられません、この争いが北にいる我らの良き友にどのような影響を及ぼすかを」(“His Majesty’s Ministers have not set forth, / How this contest affects our good friends in the North” (ll. 51-52))と、友好国への悪影響の可能性を述べる。本共同研究プロジェクト報告書の解説で渡辺は、この「北方の良き友」は 1807-8 年のヨーロッパの状況から、当時、和約によってフランスの同盟国になっていたロシアと戦ったスウェーデンを指すと推測している。この推測の通りであるとすると、この発言をしたのが熊であることが示唆的である。*OED* の見出し語 bear *n.1* では、ロシアを指すという語義が示され (“With *the*. Russia, or (more widely) its former empire or the former Soviet Union.” (*OED* “bear” *n.1*, 5.a.))、語源欄では、1730 年代以降のイギリスの政治風刺画において頻繁にロシアが熊として描かれていたこと、ロシアと熊との結びつきは、ロシアを熊の多い未開の地とみなす認識に端を発していたことが述べられている。[9]この説明が示す通り、上述の風刺画 “The Valley of the Shadow of Death” および “The Corsican Tiger at Bay”

[8] Ruwe（2014）は “Admiral Crocodile” がネルソン提督（Horatio Nelson）を指すとみなしている（p. 192）。フランスとの戦争におけるネルソンの活躍、ネルソンと Crocodile の連想関係が成立した経緯については渡辺の解説を参照。

[9] “With sense 5 compare the frequent depiction of Russia as a bear in British political cartoons from the 1730s onwards. The association originates in the perception of Russia as a wild country populated by bears (compare e.g. the bear supporters of the 16th-cent. coat of arms of the Muscovy Company).” (*OED* “bear” *n.1* etymology)

では、ロシアは熊として描かれ、鼻あるいは首に鎖をつけられている。ライオン王国の議会に話を戻すと、詩人は北方の良き友に配慮すべきだという趣旨の発言をする熊を喩えとしてどのような人物を描こうとしているのか。英国の貴族院議員でありながら実は裏でロシアとつながっている、あるいはスウェーデンへの配慮が必要とは表向きの口実で、実はロシアを敵に回すことを避けたいと考える、いわば親露派とも言えるような政治家なのかもしれない。[10]

和平派として次に発言する雄鹿は、「もし和平の道があるならば、その恩恵を得るために私たちは尽力すべきであること、これは明々白々であります」("If peace could be had, 'twas a matter quite plain, / That we should endevour that boon to obtain." (ll. 69-70))と主張するが、和平を説くだけではなく、主戦派に対し、熊以上に辛辣な態度をとる。熊は、北方の良き友への悪影響について大臣方がまだ何も述べておられません、と友国への配慮の欠如を間接的に非難する控えめな発言にとどめていた。しかし、その発言が犀と穴熊にねじ伏せられ、殊に穴熊の「これは陛下の友人たちを苛立たせ、審議を混乱させるために仕組まれたものです」("'twas intended to vex / His Majesty's friends, and their councils perplex;" (ll. 57-58))、また「貴族院のお歴々が結託して陛下の僕たちをあらゆる手立てで妨害するとしたら、これは奇妙奇天烈なことであります」("And thought it most strange Noble Lords should combine / To obstruct the King's Servants in ev'ry design." (l. 59-60))という強い非難を含んだ発言を浴びるに至り、雄鹿は強い口調で反論する。自分の高貴な友、すなわち熊の動議を非難する主戦派の態度を「無駄なことだ」("it was in vain" (l. 61))と一蹴し、「冗談ごとではありませんぞ、諸大臣は敵の攻撃を挑発することになると私は考えます」("he thought it no joke, / That Ministers hostile attacks should provoke;" (ll. 67-68)) と訴える。主戦派の意見は「臣民と王権と王冠を守るため」("His people, his rights and his crown to defend" (l. 24))という国王の勅語に応じる忠義の表明であるように見えるが、実は敵を挑発し、かえって王国を守るどころか危機にさらそうとしているのだと、主戦派の裏の面を暴こうとする意図が雄鹿の発言からは見て取れる。雄鹿を表す stag という語には、18 世紀前半からの語義として、「情報提供者、密告者」(informer) という比喩義があり、特に to turn stag という句の形で「密偵をする、密告する」という意味で用いられる (*OED* "stag" *n.1* 7a. 参照)。詩人は和平派の動物として熊と牡鹿を登場させることにより、和平派は時に敵と裏で繋がったり、味方の負の面を密告することで味方を貶めたりすることがあるというものの見方を寓意的に提示し、主戦派の正義を示唆するプロパガンダ的表現をしているのではないだろうか。このものの見方は図２のような概念領域間の写像として示すことができる。

【図２】和平派の動物が表す寓意のメタファー

＜動物＞	⇒	＜人間＞
熊 雄鹿		親露派（敵との裏での繋がり） 密告者（味方を貶める行為）

４．議会における発言のストラテジー

熊や雄鹿の懸命の意見表明にもかかわらず、彼ら和平派は主戦派に言い負かされてしまう。前節でも見たように、主戦派は和平派に対して 10 対 2 と、議員の数において圧倒的に優勢であり、自国を守るために敵と一戦交えるのは当然のことだという空気が、主戦派の面々の矢継ぎ早の発

---

[10] 和平派として最初に発言するのが熊 (bear) であることは、別の意味でも興味深い（以下は渡辺秀樹教授の指摘による)。"bear" には株式相場の用語として「弱気筋」(相場が将来下落することを予想し、売りの方針をとる者) という意味があり、"bull" の「強気筋」(相場が上昇することを予想し、買いの方針をとる者) の意味と対照をなす (Appendix に記載した *OED* の "bear" と "bull" の語義を参照)。本寓意詩における議会の描写は、株式相場とは関連がないが、主戦派の筆頭発言者の bull の強気な発言と和平派の筆頭発言者の bear の弱気な発言の対比が、株式用語としての "bull" と "bear" の語義の対比と対応関係をなしており、この対比は 2 語が<b>の頭韻を踏んでいることにより強調される。*OED* の "bull" 8. a. (「強気筋」の語義) の用例には、本寓意詩と同時代に刊行された Walter Scott の小説からの引用がある ("1817 W. Scott *Rob Roy* I. iv. 74 The hum and bustle which his approach was wont to produce among the bulls, bears, and brokers of Stock-alley." 下線部は筆者)。牛、熊、家畜取引仲介人を併記しているようにも見える語句で、株取引に関わる人たちを描写している巧みな表現が注目に値する。この時代において、動物 (家畜) と株式相場を結びつける連想パタン、言葉遊びが存在していたことを示唆する例である。

言から醸し出されている。

議会の中で少数派となっている和平派の議員たちは、発言の際に一言、自分の発言を正当化しようとする文言を添える。熊は「まさに正当なことだと思うのです、我が心情を自由に言明することは」(“I think it but right, … / That I should my sentiments freely declare.” (ll.49-50)) と前置きをする。雄鹿も「私としては、思うところを表明するのは自由であります」(“For himself, he was free what he thought to expres,” [sic=ss] (l. 65)) と全力を尽くして (“with great energy” (l. 61)) 述べる。このように、自分の発言に殊更に「自分の心の内を発言するのは自由だ」という文言を添える態度は、自分の意見をのびのびと忌憚なく発する主戦派の議員たちの態度とは対照的であり、少数派が自分の意見を表明することさえ困難な雰囲気があることを物語っている。彼ら和平派の動物たちの発言の際の文言の選び方は、人間の議会において、少数派が自らの意見を表明し難い雰囲気に身を置いたときに、多数派に押し切られないためにレトリックを駆使するというストラテジーの寓意となっている。

もう一つ、動物たちの議会での発言態度において注目すべきストラテジーがある。議員たちは貴族院に属し、最初に発言する雄牛は伯爵（Earl Bull）、次に発言する馬は男爵（Baron Horse）というように爵位で呼ばれている。貴族の爵位は、上から duke（公爵）、marquis（侯爵）、earl（伯爵）、viscount（子爵）、baron（男爵）という順序になっている。発言をする議員たちに詩人が施した格付けと、議会での発言順序を【表３】にまとめてみた。発言者の中には、貴族の爵位が明示されておらず、ただ Lord とのみ記載されている者がいる（猟犬と川獺）。彼らは貴族の子息であるか、あるいは社会的にさほど大きな発言力を持っていない貴族として扱われているのかもしれない。それとは逆に、爵位は明記されていないが高い社会的地位をもつことが明らかな者もいる。海軍大将（Admiral）の鰐、貴族院議長（Lord President）の豹、大司教（Archbishop）の雄羊である。【表３】では、彼らについては別枠に入れてまとめた。

【表３】動物議員たちの身分と発言順

爵位・身分	主戦派		和平派		曖昧	
	発言者	発言順	発言者	発言順	発言者	発言順
王族公爵（Royal Duke）	ライオン王子（Prince de Lion）	11 番				
公爵（Duke）	犀（Rhinoceros）	5 番				
侯爵（Marquis）	ビーバー（Beaver）	10 番	熊（Bear）	4 番		
伯爵（Earl）	雄牛（Bull）	1 番				
子爵（Viscount）	穴熊（Badger）	6 番				
男爵（Baron）	馬（Horse）	2 番				
海軍大将（Admiral）	鰐（Crocodile）	8 番				
貴族院議長（Lord President）	豹（Leopard）	12 番				
大司教（Archbishop）					雄羊（Ram）	13 番
無記（Lord とのみ記載）	猟犬（Hound）	3 番	雄鹿（Stag）	7 番		
	川獺（Otter）	9 番				

この表を見て気がつくことは、敵国の脅威にどう対処するかという議題に対し、議論の方向性が切り替わるときに、発言者の身分について一定の法則が概ね認められることである。彼らの議論の口火を切ったのは主戦派であるが、最初の発言者は伯爵の雄牛、2 番目は男爵の馬、3 番目は爵位が明記されていない猟犬というように、爵位は順次下がってくる。この主戦派の流れに対し、異を唱える和平派の熊は侯爵で、最初の 3 名の発言者より爵位が高い。この熊の発言を封じようと、熊の直後に発言する主戦派の犀は公爵で、熊よりさらに爵位が高い。犀を支持する穴熊は子爵で、爵位は下がる。例外的なのは穴熊に反論する雄鹿で、彼は爵位が明記されていない。雄鹿の和平を求める発言に反論する鰐は海軍大将という高い地位を誇る（この鰐が Horatio Nelson 提督の寓意であるとすると（注 8 参照）、Nelson は子爵であるから、鰐も同等の爵位を有すると推測することができる）。このように、主戦派から和平派へ、和平派から主戦派へと、直前の意見に対して流れを切り替えるため反対意見を表明しようと口を開くのは、直前の発言者より身分が高い者であることが多い。彼らは、自分と逆の意見をねじ伏せるためのストラテジーとして身分を利

用していると言える。発言者の順序と身分の関係についての詩人のこのような描写は、人間界における縦社会のストラテジーの寓意を意図しているのではないかと考えられる。

このように、多数派であり、かつ縦社会のストラテジーを利用した主戦派は、議論の主導権を握る。水生の鰐、川獺、ビーバーの主戦派としての発言を受け、議員たちの中で最高位の王族公爵であるライオン王子が主戦派につく発言をし、それにより主戦派優勢という空気は決定的になる。主戦派の貴族院議長の豹の「真実と血筋正しき王子が我々の側にあるからには、反対派の貴族院議員諸兄は、はっきりと思い知られましたかな、敵意むき出しの修正案など無駄骨だということを」(“With truth and a Prince of the blood on our side, / The Noble Beasts opposite might plainly see / How futile their hostile amendment will be,” ll. 98-100) という勝ち誇ったような発言は、主戦派の勝利を確信したことを物語っている。その時点で最後に発言する雄羊は、上述のように、戦争が是とも非とも明言せず、曖昧な態度をとる。雄羊は豹に対し、「王家の血筋正しき王子を論争の引き合いに出すとは大いに恥ずべきことです」と反論していることから、内心は和平派ではないかと推測されるが、勢いを得た主戦派に対し、大司教という高い地位をもつにもかかわらず、内心を明示せず、曖昧な態度に終始し、両陣営から顰蹙をかう。この雄羊の態度の描写は、人間界の議会発言において、身分を利用することで自分と逆の意見を封じるという縦社会のストラテジーさえも功を奏しないほど議論の方向性が決定的になった場合には、苦肉の策として曖昧発言という手法があり、しかし是非を決定するというような緊迫した場面ではその曖昧な手法がかえって逆効果となり、誰の賛同も得られないという事態の寓意となっている。

５．おわりに：寓意詩というメディア

本研究では、動物たちが貴族院議員という身分で国家の有事にどう対応すべきかについて議論を戦わせる議会の模様を描いた詩 *The Lion's Parliament* を考察し、本作品では、動物たちがあたかも人間のように知性や感情、意志をもって発言をするという擬人化メタファーを用いた描写がなされていると同時に、動物の名称と主戦派・和平派の立場との対応関係や、それぞれの動物の発言における主張内容が、この詩の刊行当時の英国が直面していた不安定な世界情勢を想起させる寓意のメタファーとして機能していることを明らかにした。また、動物議員たちの発言内容、発言態度が、論戦において劣勢に立った者が用いるレトリック、議員が論敵の意見を封じるために身分の高さを利用する態度など、人間が駆使する議会でのストラテジーを暗示する寓意のメタファーとなっていることも論じた。

The Lion's Parliament が、チョウやバッタ、クジャク、ライオン、コクマルガラスなどの宴会を描く児童向け動物寓意詩群と同時期に刊行されたことは示唆に富む。娯楽と親善の宴に興じる者たちとしてなじみのある、子供にも親しみやすい動物たちをキャラクターとして登場させることにより、作者はさまざまな読者層に国家の危機にあたっての思考法、対処法を意識させることを意図しているのではないだろうか。本作品は、擬人化メタファー、寓意のメタファーという意味創出の手法を用いることにより、ナポレオンの脅威に迫られた英国社会に広く戦意高揚を訴えかけるメディアとしての役割を果たしていると考えられる。

Appendix: *The Lion's Parliament* 登場動物の役割・身分、立場・行動、動物名比喩義

初出行	動物名（網掛けは議会での発言者）	役割・身分	有事に際しての立場・行動	*OED* に記載された動物名比喩義（括弧内は初出年） オンライン最終閲覧日：2020 年 3 月 14 日
4	Lion ライオン	King 国王	議会を召集する	3. *figurative* (chiefly after biblical usage; cf. Rev. v. 5). a. Taken (in a good sense) as the type of one who is strong, courageous, or fiercely brave. (c1175) 5. c. *British Lion*, the lion as the national emblem of Great Britain; hence often used *figuratively* for the British nation. (1687)
5	Panther 黒豹	Lord Steward[11] 王室家政長官	勅語を大法官に伝える	1. c. *figurative*. A fierce, powerful, or elusive person or thing. (1822)

[11] Lord Steward: 王室家政長官（貴族の枢密顧問官であり、王室家政局の最高官）（『リーダーズプラス』参照）

8	Elephant 象	Lord Chancellor[12] 大法官	勅語を議員に伝える、勅語奉答文を奏上する	1. b. *figurative* of a man of huge stature.(1609)
10	Camel 駱駝	Commissioner 行政長官	大法官の脇侍として勅語を聞く	1. b. *figurative*. A great awkward hulking fellow. (1609)
10	Zebra 縞馬	Commissioner 行政長官	大法官の脇侍として勅語を聞く	--
12	Fox 狐	Speaker 下院議長	勅語拝聴のために庶民院議員を先導する	2. *figurative*. a. A man likened for craftiness to a fox. (c1000) b. ? Used as adj.: Fox-like, cunning. (c1175)
18	Tiger 虎	Usurper 王位簒奪者 Despot 独裁者	敵国の元首	4. *transferred* and *figurative*. Applied to one who or that which in some way resembles or suggests a tiger. a. A person of fierce, cruel, rapacious, or blood-thirsty disposition; also sometimes, a person of very great activity, strength, or courage. (?a1513)
27	Bull 雄牛	Earl 伯爵	主戦派として発言する	8. a. *Stock-Exchange* [see bear n.1 10]. One who endeavours by speculative purchases, or otherwise, to raise the price of stocks. *Bulls* and *Bears*, the two different classes of speculators. *Bull* was originally a speculative purchase for a rise. (1714) Cf. **John Bull**. 1.a. A name given to the English nation personified. Sometimes more generally: a name given to Britain (or the United Kingdom) personified; cf. England n. 1a, and etymological note at that entry. The character John Bull is typically represented as a stout, red-faced farmer in a top hat and high boots. (1748) b. As a count noun: an Englishman who exemplifies the supposedly typical national character; a typical English (or British) person, often one who is (strongly) patriotic. (1772) Etymology: < the name of *John Bull*, a character representing the English nation in John Arbuthnot's satirical pamphlet *Law is a Bottomless Pit* (1712).
33	Wolves 狼		敵	1. b. In comparisons, with allusion to the fierceness or rapacity of the beast; often in contrast with the meekness of the sheep or lamb. (c950) 5. a. A person or being having the character of a wolf; one of a cruel, ferocious, or rapacious disposition. In early use applied esp. to the Devil or his agents (wolf of hell); later most frequently, in allusion to certain biblical passages (e.g. Matt. vii. 15, Acts xx. 29), to enemies or persecutors attacking the 'flocks' of the faithful. (a900) † b. Applied to a person, etc. that should be hunted down like a wolf. (Cf. wolf's-head n.) Obsolete. (1487) c. *slang*. (a) A sexually aggressive male; a would-be seducer; (1847)
33	Hyæanas ハイエナ		敵	2. *transferred*. Applied to a cruel, treacherous, and rapacious person; one that resembles the hyena in some of its repulsive habits. (1671)
37	Horse 馬	Baron 男爵	主戦派として発言する	3. *Military*. A horse and his rider; hence a cavalry soldier. † a. In singular, with plural horses. Obsolete. rare. (1548) b. Collective plural horse: Horse soldiers, cavalry. See also light horse n. (1548) c. horse and foot n. both divisions of an army; hence, whole forces; †adv. with all one's might (*obsolete*). (c1600) 4. *figurative*. Applied contemptuously or playfully to a man, with reference to various qualities of the quadruped. (?a1513)

[12] Lord Chancellor: 大法官（閣僚の一人で、歴史的には司法部の頂点、議会会期中は上院議長でもあった；起源的には国王の国璽保持者で秘書的機能を果たしていた）（『リーダーズ英和辞典』参照）

47	Hound 猟犬	Lord	主戦派として発言する	4. a. Applied opprobriously or contemptuously to a man: cf. dog n.1 5a; a detested, mean, or despicable man; a low, greedy, or drunken fellow. (OE)
49	Bear 熊	Lord Marquis 侯爵	和平派として発言する	†2. *figurative. Obsolete*. A personification of sloth or gluttony. (c1230) 3. a. An unrefined or uncouth person. Now somewhat *rare*. (c1395) 5. a. With *the*. Russia, or (more widely) its former empire or the former Soviet Union. (1794) 10. *Stock Market*. Stock contracted to be sold at a set price at a future date, in the seller's expectation that market prices will have fallen by then. Now rare. The trader may or may not already own the contracted stock; see sense 11. (1709) 11. *Stock Market*. A trader who expects prices to fall and so sells stock, which he or she may buy back later at a lower price. Also: a trader who sells stock he or she does not hold, hoping to be able to buy it cheaply before delivery is due. Cf. earlier bearskin man at *bearskin* n. Compounds b. (1718)
55	Rhinoceros 犀	Duke 公爵	主戦派として発言する	1.b. In extended use. A person who resembles a rhinoceros, *esp*. a thick-skinned person. (1602)
57	Badger アナグマ	Viscount 子爵	主戦派として発言する	--
61	Stag 雄鹿	Lord	和平派として発言する	7. *slang*. [Probably < sense 1; but the reason for the use is obscure.] a. An informer; esp. in phrase ***to turn stag***. Also see quot. 1725. 1725 *New Canting Dict*. Stag,..as, I spy a Stag, used by..Shepherd, lately executed, when he first saw the Turnkey of Newgate, who pursu'd and took him.
73	Crocodile 鰐	Admiral 海軍大将	主戦派として発言する	2. a. The crocodile was fabulously said to weep, either to allure a man for the purpose of devouring him, or while (or after) devouring him; hence many allusions in literature. (See also *crocodile tears* n. at Compounds 1a.) (c1400) b. Hence *figurative*. A person who weeps or makes a show of sorrow hypocritically or with a malicious purpose. (1595)
	frogs 蛙		敵[13]	8. A person likened to a frog. Usually as a term of abuse. See also *frog-face* n. (a) at Compounds 2a, *frog-faced* adj. at Compounds 1c. (?a1400 (▸a1338)) †9. *derogatory*. A Dutch person; = FROGLANDER n. *Obsolete*. (1652) 10. Usually *derogatory*. Frequently with capital initial. a. A French person or a person of French descent; occasionally as a form of address. (1657)
79	Otter カワウソ	Lord	主戦派として発言する	†3. slang. A sea-faring person; a sailor. *Obsolete. rare*. (1650)
83	Beaver ビーバー	Marquis 侯爵	主戦派として発言する	--
85	Lion	Prince, Royal Duke 王子・王族公爵	主戦派として発言する	（上述）
97	Leopard ヒョウ	Lord President 貴族院議長	主戦派として発言する	3. b. *Heraldry*. A lion passant guardant [French *lion léopardé*], as in the Arms of England. (c1300)
103	Ram 雄羊	Archbishop 大司教	曖昧な発言をする	1.c. *colloquial*. A lecherous or sexually voracious man; (also) a sexually aggressive or domineering man. (a1616)
116	Donkey 驢馬	Chief Justice 首席裁判官	勅語奉答文奏上に参列する	2. *transferred*. a. A stupid or silly person. (1840)
117	Mule 騾馬	Marquis 侯爵	勅語奉答文奏上に参列する	2. In extended use, of a person. a. *gen*. A person having a quality characteristic of or associated with mules, esp. a stupid, obstinate, or physically tough person. Now *rare*. (a1500)

[13] frogs はフランスおよびオランダを指すと考えられる。渡辺の解説参照。オランダ王国は 1806 年から 1810 年までナポレオンの弟ルイ・ボナパルトが国王として統治したフランス帝国の衛星国。

117	Goat　山羊	Baron　男爵	勅語奉答文奏上に参列する	4. a. colloquial. As a term of reproach or abuse: a lustful or lascivious man; a lecher. Chiefly in old goat. (1601) b. *colloquial*. A foolish or contemptible person; *spec*. (esp. *in old goat*) an offensive or objectionable old person (typically a man); frequently as a term of abuse. Later also occasionally: a gullible person, a dupe. (a1616)
122	Apes 類人猿	Gentlemen pensioners 儀仗衛士	勅語奉答文奏上を受ける国王を護衛する	3. Hence *figurative*. One who 'plays the ape'; an imitator, a mimic. a. contemptuously or derisively. (?c1225) †b. in a good or neutral sense. *Obsolete*. (1594) †4. *transferred*. A fool. (c1330)
123	Jackal ジャッカル	Lord	勅語奉答文奏上を受ける国王に服侍する	2. A person who acts like a jackal, esp. by behaving in an aggressive or predatory way, often operating as part of a group or gang; *spec*. a subordinate who carries out menial, dull, or preparatory work. With allusion to the supposed role of the jackal as 'the lion's provider'; see the note at sense 1. (1649)
124	Baboon 狒々	Lord Chamberlain 宮内長官	勅語奉答文奏上を受ける国王に服侍する	3. *derogatory*. A foolish, stupid, or contemptible person; (also) a person considered to resemble a baboon in appearance. Frequently as a term of abuse. (1592)
125	Hogs　雄豚	Yeomen 国王衛士	勅語奉答文奏上を受ける国王に服侍する	6. *derogatory*. a. A person likened to a pig in being unpleasant, self-indulgent, greedy, dirty, etc. (?c1430)
127	Puppies 子犬	pages 小姓、aid-de-camps 副官	勅語奉答文奏上を受ける国王に服侍する	2. a. *colloquial* (frequently *derogatory*). A foolish, conceited, or impertinent young man; (also) a young person, *esp*. one who is inexperienced or naive. (?1544)
128	Rats　溝鼠	servants 従者	勅語奉答文奏上を受ける国王に服侍する	4.a. A dishonest, contemptible, or worthless person; *spec*. a man who is deceitful or disloyal in a romantic relationship (cf. love rat n. at love n.1 Compounds 6). (1571) b. Originally: †a person who is arrested for disorderly conduct, usually as a result of being intoxicated. (*obsolete*). Now, in weakened sense (regional (*Newfoundland)*): a disorderly person. (1607) † c. A pirate. (1600) d. Esp. in political contexts: a person who deserts his or her party, side, or cause; a person who puts personal considerations before political principles, departs radically from the official party line, or adopts the political beliefs of a rival party. Frequently in figurative context, with reference to the belief that rats leave a ship about to sink or a house about to fall down; cf. Phrases 4. (1755) e. *slang*. A person who gives information, esp. of an incriminating nature, on another person to the police or other authority, an informer; spec. an informer in a prison. (1818)
128	Mice 二十日鼠	servants 従者	勅語奉答文奏上を受ける国王に服侍する	2. b. A timid, quiet, or retiring person. (1839) 3. a. A darling, a sweetheart. Frequently as a term of endearment, esp. for a woman. Now archaic.　(c1525)
129	Bull-dogs ブルドッグ	guards　衛兵	勅語奉答文奏上を受ける国王に服侍する	1. c. *transferred*. Applied to persons: One that possesses the obstinate courage of the bulldog. (1852) 2. †A sheriff's officer (*obsolete*); one of the Proctors' attendants at the Universities of Oxford and Cambridge. *colloquial*. (1699)
130	Mastiff マスチフ		勅語奉答文奏上を受ける国王に服侍する	† c. In extended use. (In early use frequently as a term of abuse.) *Obsolete*. (?a1591)
131	Monkey 猿	Sir	勅語奉答文奏上を受ける国王に服侍する	5. A child; a junior; a foolish person. (1583) 6. A mimic, a person who acts comically; a mischievous person; a rascal, a scamp. Now frequently in little monkey. (1589)

参考文献

大森文子 2006.「動物比喩に表れる獣性と人間性　共同研究英語動物名のメタファー(5)」『詩的言語とメタファー　言語文化共同研究プロジェクト 2005』高岡幸一編　大阪大学 47-60.
----- 2009. 「イディオムと詩的表現に見られる動物を媒体とした感情メタファー：共同研究　英語動物

名のメタファー（11）」『言語の歴史的変化と認知の枠組み　言語文化共同研究プロジェクト 2008』尾崎久男編　大阪大学 23-36.
----- 2012. 「動物界の王者とトポス：英語動物名の比喩義の構造　共同研究　英語動物名のメタファー（12）」『トポスのレトリック　言語文化共同研究プロジェクト 2011』アンドリュー・村上スミス編　大阪大学 59-70.
----- 2013. 「馬の象徴的意味と比喩　共同研究　英語動物名のメタファー（15）」『レトリックの伝統と伝搬　言語文化共同研究プロジェクト 2012』渡辺秀樹編　大阪大学 19-28.
----- 2014. 「饗宴の文化的意味：コクマルガラスの寓意詩のメタファーをめぐって」『テキストのレトリック 文化のレトリック：修辞・思想・翻訳 言語文化共同研究プロジェクト 2013』大森文子編　大阪大学 23-32.
----- 2016. 「犬の寓意詩 THE COUNCIL OF DOGS における擬人化と寓意のメタファー」『越境するレトリック：意味・認識・間テクスト性　言語文化共同研究プロジェクト 2015』大森文子編　大阪大学 19-34.
渡辺秀樹 2006.「イヌ科の動物名の人間比喩の意味範囲と構造　共同研究　英語動物名のメタファー(5)」『詩的言語とメタファー　言語文化共同研究プロジェクト 2005』高岡幸一編　大阪大学 35-44.
----- 2007. 「メディア英語の犬品種名メタファーの構造　poodle と rottweiler を中心に」『文化とレトリック　言語文化共同研究プロジェクト 2006』大森文子編　大阪大学 31-46.
----- 2008.「イヌ科名詞・派生語の人間比喩のレベルと構造　共同研究　英語動物名のメタファー(8)」『言語文化研究』大阪大学 34: 93-108.
----- 2011.「シェイクスピアにおける賞賛と罵倒のレトリック動物名人間比喩用法の対義・類義の構造」『文化とレトリック認識　言語文化共同研究プロジェクト 2010』大森文子編　大阪大学 1-20.
----- 2016. 「19 世紀英国動物寓意詩 THE COUNCIL OF DOGS. (1808) 本文校訂・脚注・日本語訳」『越境するレトリック—意味・認識・間テクスト性　言語文化共同研究プロジェクト 2015』大森文子編　大阪大学 1-18.
渡辺秀樹・大森文子 2008.「19 世紀英国児童向け動物寓意詩 3 編　テキスト・全訳・語注・動物人名比喩義対照表・メタファー分析」『メタファーとスキーマ　言語文化共同研究プロジェクト 2007』渡辺秀樹編　大阪大学 5-39.
----- 2012.「19 世紀英国児童向け動物寓意詩の翻訳とメタファー論考　*The Feast of the Fishes or The Whale's Invention to his Brethren of the Deep*.」『トポスのレトリック：場所・定型表現・認知　言語文化共同研究プロジェクト 2011』アンドリュー・村上スミス編　大阪大学 9-58.
----- 2014.「19 世紀英国動物寓意詩　*The Jackdaw at Home* 全訳・注釈・メタファー論考」『テキストのレトリック　文化のレトリック—修辞・思想・翻訳　言語文化共同研究プロジェクト 2013』大森文子編　大阪大学 1-30.
Ashton, John, 1884. *English Caricature and Satire on Napoleon*. Vols. I and II. London, Piccadilly: Chatto & Windus.
Halupka-Rešetar, Sabina and Biljana Radić (2003) "Animal Names Used in Addressing People in Serbian," *Journal of Pragmatics* 35, 1891-1902.
Lakoff, George, 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. The University of Chicago Press, Chicago.
-----, 1993. "The Contemporary Theory of Metaphor," in Ortony, Andrew ed., *Metaphor and Thought*, Second Edition, 202-251. Cambridge University Press, Cambridge.
Lakoff, George and Mark Johnson, 1980. *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press, Chicago.
-----, 1999. *Philosophy in the Flesh*. Basic Books, New York.
Lakoff, George and Mark Turner, 1989. *More than Cool Reason*. The University of Chicago Press, Chicago.
Lovejoy, Arthur O., 1936. *The Great Chain of Being: A Study of the History of an Idea*, Harper Torchbook edition, 1960. Harper & Brothers, New York.
Nesi, Hilary, 1995. "A Modern Bestiary: A Contrastive Study of the Figurative Meanings of Animal Terms," *ELT Journal* 49/3, 272-278.
Newbery, Elizabeth, 2005. *Baron Crocodile; The Story of Horatio Nelson.* National Maritime Museum.
Nilsen, Alleen Pace, 1996. "Of Ladybugs and Billy Goats: What Animal Species Names Tell About Human Perceptions of Gender," *Metaphor and Symbolic Activity*, 11(4), 257-271.
Ruwe, Donelle, 2014. *British Children's Poetry in the Romantic Era: Verse, Riddle, and Rhyme*. Houndsmill, UK: Palgrave Macmillan.
The Oxford English Dictionary Online, Oxford University Press, 2020. (https://www.oed.com/)
『リーダーズ英和辞典第 3 版』研究社、2012, 2016.
『リーダーズプラス』研究社、1994, 2016.